ヤルタ・ベルリン・ニューヨーク

高橋　正

Y

昨年の二月二十四日、筆者は教え子たちとヤルタの海岸通りを散歩していた。チェーホフの短編「犬をつれた奥さん」で有名な、あの海岸通りである。

暖冬とはいえ、北のモスクワやレニングラードでは、灰色の雲が低く垂れ籠め、大地は雪で覆われているというのに、屏風のようなクリミア山脈が寒気を遮るここヤルタでは、青空が広がり、暖い陽光が燦々と降り注いでいた。

「ヤルタじゃなくて、ヤルカだね」

ガイドのモスクワ大学卒業生ビクトルと大笑いになったが、私達は文学散歩を楽しむためにヤルタまでやって来たわけではない。国際関係論の授業の一環として、ヤルタ体制のルーツを尋ねてやって来たのである。

正午、その場に居合せた二十名余りの学生の一人が、不図声を掛ける。「全員集合！急いで！　東方に向って整列！　一分間黙禱します。黙禱！」東京は既に午後六時だが、現地時間に従って、昭和天皇の大喪の儀に一枚加わろうというわけである。

二十歳前後の学生達の大半が、素直に掛け声に応じて頭を下げた。前年来、昭和天皇の御不例と崩御についての夥しいマスコミ報道に洗われ、前日、日本を含めて戦後世界の基本的枠組みを決定づけたヤルタ会談の会議場リバディア宮その他を見学した直後とあって、日頃は歴史や政治に関心の薄い若者達も、少しは天皇や日本、あるいは昭和という時代について想いをいたす気になったらしい。

日本から遠く離れたソ連領クリミア半島突端の保養地で、戦争を知らぬ日本の若者たちの〝東方遙拝〟にお目に掛かろうとは、筆者も意外であったが、同時に、ここまで連れてきた甲斐があったという気がして、嬉しくもあった。

B

〝壁〟の両側に住むドイツ人自身も含めて世界中、〝ベルリンの壁〟がこんなにも早く崩壊するとは誰も思っていなかったとマスコミは言う。

しかし、誰も予想しなかったというのはマスコミのよく使う言葉の綾で、実は、予測した者がいなかったわけではない。手前味噌になるが、筆者もその一人で、昨年の「知識」という綜合雑誌の一月号に「大胆な予測をすれば、〝壁〟は今年中に開放される」とはっきり書いている。

これは当てずっぽうな予言ではなく、歴と

した根拠に基く予測なのだ。根拠とは、ほかならぬ東ドイツのホーネッカー国家評議会議長兼社会主義統一党書記長（当時）が早くも八七年九月、生まれ故郷の西ドイツ・ザール州ノインキルヘンを四〇年ぶりに訪れた際、「緊張緩和政策を進めるなかで、両ドイツの国境が東ドイツとポーランドの間の国境のようになり、ドイツ人が国境によって分たれることなく一体化する日が来よう」と、前後矛盾するようだが、少くとも〝壁〟の撤去だけは確実に示唆する発言を行なっていることである。たとえホーネッカーが久しぶりの里帰りで感傷的になり、かなり先きのことを想定してそう言ったにせよ、こうした国際政治にかかわる重大発言は、クレムリン即ちゴルバチョフ・ソ連共産党書記長の事前の了解なしにはあり得ず、この時点で、ゴルバチョフが〝壁〟の開放に同意したばかりでなく、むしろ〝壁〟の開放も含めて積極的に東ドイツのペレストロイカを促したことを物語っている。そのため、その後、二人の関係は悪化し、遂に昨年、ホーネッカーの退陣を招くに至った。

〝壁〟は東西両ドイツ間の特殊な経済関係即ちカネとモノの流通については、すでにかなり前から無きに等しかったし、空を駆ける電波すなわち情報の面でも無力化していた。昨夏、ゴルバチョフがハンガリー＝オーストリア間の〝鉄のカーテン〟撤去に異計を唱えなかった時、〝壁〟は尻抜けとなり、すでに無用の長物と化していたのである。

NY

昨年九月のある朝、学生をつれて、ニューヨーク・マンハッタン東五十二丁目にあるフジ・テレビのスタジオを訪れたことがある。日本では夕方六時から一時間放映されているニュース番組「スーパータイム」を衛星中継し、ローカル・ニュース（この場合はニューヨーク）も織り込みながら朝七時から九時まで同時放映している現場を見るためである。この放送はニューヨークの他にロサンゼルスとサンフランシスコでもそれぞれ、在留日本人や日系米人など日本語のわかる視聴者向けに行われている。

知人の曽根支局長によると、在留日本人八万人のうち六万人が毎朝、このスーパータイムを見ているそうだ。マンハッタンでは、同じく衛星を使ってファクシミリ電送された「読売新聞」朝刊が売られており、時差の関係でニューヨークではまだ前の日のうちに読める。飛行機が運んで来る三日遅れの新聞や、聞きづらい短波ラジオで日本語放送をまさぐりながら日本のニュースを仕入れていた往時に比べれば隔世の感があり、技術革新がもたらした情報環境の革命的変化に、今更ながら驚かざるを得ない。

周知の通り、ニューヨークには大量の日本企業が進出し、日系企業が店を張り、すし屋、ラーメン屋、カラオケバーまで無数にある。朝、出勤前にスーパータイムを見、日本企業で働き、昼食は手近なすし屋かラーメン屋で済ませ、会社帰りにカラオケバーで酒を飲みながら演歌を歌い、帰宅して読売新聞を読み、日本人の妻君と寝物語りをする。――ニューヨークにいながら日本と全く変わりない生活が出来るのだ。

有難い世の中になったものである。しかし、これで「ニューヨークでは……」などとあちら風を吹かされたのでは、こちらがたまったものではない。技術革新と日本の経済発展は結構な話だが、それはそのまま国際化につながるとは限らないのである。